

文 化

日本映画初のスターで、明治から大正時代に活躍した尾上松之助(1875~1926年)は、ぎょろりと目玉をむき出しにして見得を切る姿から「目玉の松ちゃん」との愛称で親しまれた。私は10年以上にわたり松之助の遺品を収集・整理し、顕彰する活動を手掛けている。

私が生まれた京都の仏壇仏具店は生前の松之助と家族ぐるみの付き合いがあり、祖母から何度も「松ちゃんはえらい人やった」と聞かされて育った。しかし家業を離れ、東京で25年近く銀行勤めをする間、松之助と交わることはなかった。転機が訪れたのは2010年、店主である姉が入院し廃業に備え実家に戻ったときだ。毎年5月の節句に松之助の甲冑を床の間に飾っていたのを思い出した。「楠正成」役を演じた際に身につけたもので、これは後世に伝えなければと感じた。映画監督の牧野省三に認められ、1000本以上の映画に出演したとき

「目玉の松ちゃん」よ、永遠に

◇日本映画初のスター尾上松之助の遺品収集、映画祭など顕彰活動も◇ 松野 吉孝



岡山後楽園で撮影された映画「荒木又右衛門」(中央が尾上松之助)

れるが、現存するフィルムは十数本にとどまる。葬儀には20万人が集まるほどの人気だったが、撮影所がひしめいていた京都でも今や存在を知る人は少なくなっていた。13年、松之助の墓がある等持院で甲冑を展示する機会を得た。私の個人名では都合が悪いと思つて「尾上松之助遺品保存会」を立ち上げた。名前にふさわしい活動させねばと遺族に連絡を取ると、向こうもどうか保存できないものかと考えていたそうだ。

大阪の遺族宅は水害もあり、なんとか貴重な品々を残してくれていたという状態。古い棚やたすを探すと、アルパムやプロマイド写真、自筆の手紙、愛用の掛け軸がどんと出てくる。かれこ

れ20回は訪れたが、その度に何かが見つかった。ネットオークションや活動を聞きつけた人からの寄贈でさらに資料が集まる。全容は私自身もはっきりと分からないが、堅く見積もつて2500点以上はあると思う。資料を時系列で把握できるようにデータベース化も進めている。新型コロナウイルス禍の頃、部屋に閉じこもつて大正期の新聞を読みあさり、映画広告や関連記事をもとに出演作品をリスト化し、遺品をひも付けていった。ただ、データ打ち込みに専念するあまり頸椎の変形が進み、障害が残つてしまった。満身創痍ではあるものの、地道な作業は続けなければという使命感を強めている。

瞬間、何ものにも代えがたい感動を覚えた。日本映画の黎明期、庶民は松之助の活動写真を見て元気をもらつた。松之助も人々を喜ばせようとずっと出演し続けた。生誕150年と百回忌にあたる25年は、2月の下鴨映画祭で「豪傑児雷也」などを披露し、さらに9

月には早稲田大学でも上映会を企画する。保存会としての活動は今後、活弁の魅力を普及させる方向にかじを切りたいと考えている。銀幕の歴史に思いをはせつつ、その草分けだった松之助を知る人がもつと増えることを願う。(まつたのよしとか元銀行員)